武蔵野日曜聖書講筵

クリスティアノス
――使徒行伝第11章1～26節――

１９９１年7月14日
小池辰雄

心の割礼　聖霊という賜物　無礙の一道　キリスト直結者　本当のクリスティアノス

【使徒行伝11】

1 使徒たち及びユダヤに居る兄弟たちは、異邦人も神の言を受けたりと聞く。2 かくてペテロのエルサレムに上りしとき、割礼ある者ども彼を詰りて言う、3 『なんじ割礼なき者の内に入りて之と共に食せり』4 ペテロ有りし事を序正しく説き出だして言う、5 『われヨッパの町にて祈り居るとき、我を忘れし心地し、幻影にて器のくだるを見る、大いなる布のごとき物にして、四隅もて天より縋りくだされ我が許にきたる。6 われ目を注めて之を視るに、地の四足のもの・野の獣・匍うもの・空の鳥を見たり。7 また「ペテロ立ちて、屠りて食せよ」という声を聞けり。8 我いう「主よ、可からじ、潔からぬもの穢れたる物は、かつて我が口に入りしことなし」9 再び天より声ありて答う「神の潔め給いし物を、なんじ潔からずと為な」10 かくの如きこと三度にして終には、みな天に引き上げられたり。11 視よ、三人の者カイザリヤより我に遣されて、はや我らの居る家の前に立てり。12 御霊われに、疑わずして彼らと共に往くことを告げ給いたれば、この六人の兄弟も我とともに往きて、かの人の家に入れり。13 彼はおのが家に御使の立ちて「人をヨッパに遣し、ペテロと称うるシモンを招け、14 その人、なんじと汝の全家族との救わるべき言を語らん」と言うを、見しことを我らに告げたり。15 ここに、われ語り出づるや、聖霊かれらの上に降りたもう、初め我らの上に降りし如し。16 われ主のかつて「ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは聖霊にてバプテスマを施されん」と宣給いし御言を思い出せり。17 神われらが主イエス・キリストを信ぜしときに賜いしと同じ賜物を彼らにも賜いたるに、われ何者なれば神を阻み得ん』18 人々これを聞きて黙然たりしが、やがて神を崇めて言う『されば神は異邦人にも生命を得さする悔改を与え給いしなり』

19 斯てステパノによりて起こりし迫害のために散らされたる者ども、ピニケ、クプロ、アンテオケまで到り、ただユダヤ人にのみ御言を語りたるに、

20その中にクプロ及びクレネの人、数人ありてアンテオケに来たりし時、ギリシヤ人にも語りて主イエスの福音を宣伝う。21主の手かれらと偕にありたれば、数多の人、信じて帰依せり。22この事エルサレムに在る教会に聞こえたれば、バルナバをアンテオケに遣わす。23かれ来りて、神の恩恵を見てよろこび、彼等に、みな心を堅くして主におらんことを勧む。24彼は聖霊と信仰とに満ちたる善き人なればなり。爰に多くの人々、主に加わりたり。25斯てバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに往き、26彼に逢いてアンテオケに伴いきたり、二人ともに一年の間かしこの教会の集会に出でて多くの人を教う。弟子たちのキリステアンと称えらるる事はアンテオケより始まれり。

●心の割礼

1使徒たち及びユダヤに居る兄弟たちは、異邦人も神の言を受けたりと聞く。2かくてペテロのエルサレムに上りしとき、割礼ある者ども彼を詰りて言う、3『なんじ割礼なき者の内に入りて之と共に食せり』

これがユダヤ人のユダヤ教の在り方なんです。今でもそうです。ユダヤ人が、そのパリサイのチャンピョンであるパウロがあれだけの回身をして福音の世界の第一の使徒となった、その事を今でも彼らは、

「パウロは間違っている」

としている。これはユダヤ人の大間違いなんです。キリストは天界から本当に呻いていらっしゃると思う。最後には、羔の怒りがくる。

「原始福音」の人たちが、もし、彼らを本当にキリスト教に変えるという、それだけの事をそのうちにしてくれるならば、これは本当に万歳ですけれども。そうでなくて、ただ親しくしているというのでは、いつまでたっても残念です。

私たちは、今日ここに大事な

「クリスティアノス」

という――「クリストのもの」、クリスチャンという意味です――我々が本当にキリストのものならば、ものらしく本当に身をもって証していかなかったならば、クリスチャンではない。パウロがはっきりその事を言っている。

私は学校で授業をしながら、必ず福音を説いていました。「戦い」というのは、本当の愛なんです、相手の人を本当に生かすための。活かす剣です。パウロはよく剣を持って描かれているが、あの剣は神の言葉です。どうぞ、そういうことで、何も授業に限りません。どういう世界に皆さんがいらっしゃっても、男でも女でも、キリストを身をもって証するのでなかったら、生きがいはない。そうしなければ、本当の力は来ない。それを是非やってください。

ところが、このユダヤ人は、「割礼なき者」と言って「割礼」を問題にしている。ペテロは何しているか、と言いたいわけです。心の割礼じゃないんだ、これは。ただ、いわゆる儀式的な割礼だけをやっている。ペテロは心の割礼をさせられてしまった、ペンテコステで。

●聖霊という賜物

4 **ペテロ有りし事を序正しく説き出だして言う、5『われヨッパの町にて祈り居るとき、我を忘れし心地し、幻影にて器のくだるを見る、大いなる布のごとき物にして、四隅もて天より縋りくだされ我が許にきたる。6われ目を注めて之を視るに、地の四足のもの・野の獣・匍うもの・空の鳥を見たり。7また「ペテロ立ちて、屠りて食せよ」という声を聞けり。8我いう「主よ、可からじ、潔からぬもの穢れたる物は、かつて我が口に入りしことなし」**

10章に書いてあることを、ここに繰り返して書いてある。潔き獣、潔からざる獣、と区別していた。ところが、この幻でもって、天界からキリストの声が、

「ペテロ立ちて、屠りて食せよ」

「いえ、いけません、主さま。私は穢れたるものを口にしたことはありません」

と、相変わらず、ペテロはその点では、古きペテロがそこに出ている。

9再び天より声ありて答う「神の潔め給いし物を、なんじ潔からずと為な」

神さまが造ったものは、みんなこれは同じなんだと。蹄が割れてるの割れてないの、鱗があるのないのと、そんな事ではないと。ところが、相変わらずやっているんだ。旧約聖書に書いてあるものだから。

だから、福音を本当に受けとらないで、旧約を読んだら、躓くですよ。新約で本当にキリストを受けとったら、キリストの光で、どれは捨てるべきものか、どれは受けとるべきものかが分かる。旧約聖書というのは、そういう混淆のものだからね。

10かくの如きこと三度にして終には、みな天に引き上げられたり。11視よ、三人の者カイザリヤより我に遣されて、はや我らの居る家の前に立てり。12御霊われに、疑わずして彼らと共に往くことを告げ給いたれば、この六人の兄弟も我とともに往きて、かの人の家に入れり。13彼はおのが家に御使の立ちて「人をヨッパに遣し、ペテロと称うるシモンを招け、14その人、なんじと汝の全家族との救わるべき言を語らん」と言うを、見しことを我らに告げたり。15ここに、われ語り出づるや、聖霊かれらの上に降りたもう、初め我らの上に降りし如し。16われ主のかつて「ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは聖霊にてバプテスマを施されん」と宣給いし御言を思い出せり。

パウロはひっくり返されて、それから今度は、十字架が本当に掴めた。パウロにおいては、ひっくり返されてから、十字架が分かった。しかし、恩恵の順序からいうと、十字架がも

ちろん先です。

「十字架で贖罪しないことには、聖霊を降さない」

というのは、キリストのあの有名な言――ルカ伝12章の49、50節――

「我、火を投ぜんために、やって来たんだ」

と。聖霊のことです。

「この火、燃えたらんには、何をか望まん」

「これだけなんだ、私は。そのためにやって来たんだ。だけれども、その火を投ずる前に、受くべきバプテスマ（十字架）がある。思いせまることいかばかぞや」

と。十字架なくしては、聖霊は来ない。この聖霊は旧約でいっている「聖き霊」とは違う。だから、十字架をいい加減にし、贖罪をいい加減にして、イザヤ書53章をいい加減にしてたら――イザヤ書53章を身をもって証しようとしたのがキリストなんですから――聖霊はこない。

そうしたら、十字架を本当に受けとって、

「我、キリストと共に十字架せられたり、もはや、われ生くるにあらず、キリスト、わが中にありて生き給うなり」（ガラテヤ2・20）

とは何ですか。御霊のキリストじゃないですか。このガラテヤ書2章20節は、正にキリストのさっきの言葉をパウロが告白しているだけのはなし。

17神われらが主イエス・キリストを信ぜしときに賜（たま）いしと同じ賜物（たまもの）を彼らにも賜いたるに、

それで、同じような賜物が、聖霊という賜物がやってきた。この場合の「賜物」とは聖霊のことです。聖霊の後からくる賜物ではない。

われ何者なれば神を阻（はば）み得ん』

神さまのなさることを、どうして拒むことができるかと。

●無礙の一道

親鸞の「無礙（むげ）の一道」というやつだ。

「念仏は無礙の一道なり」

という。いやぁ、親鸞は凄いね。念仏も、こっちが念仏しているんじゃない。念仏させられている。

「本願の念仏は上からやってきて、祈らざるを得ない。念仏せざるを得ない、南無阿弥陀仏と称（い）わざるを得ない」

と。だから、称わざるを得ない南無阿弥陀仏は、南無阿弥陀仏と称うと直ちに力が来るんです。法然は一日に何回もやったけれども、親鸞はそんなことを言ってない。法然のは、多少、自力（じりき）の角度がまだなきにしもあらず。親鸞になると、その自力が完全にすっ飛んで

しまった。

手島さんという人は聖道門の人です、彼の性格からいって。非常に努力精進し、こちらから祈り抜くという角度です。だから、手島さんは禅宗が好きですね、あれは聖道門の方だから。まだ、最澄、空海の方だ。法然、親鸞、特に一遍、こっちは完全に易行道です。福音の世界は、この易行道なんです。もちろん、聖道門的な面もあるけれども、何といっても、易行道なんです。受けとっていく方です。キリスト自身が易行道なんだからね。

「私は何もできない。何も言えない。ちっとも善くはない」

と、全部、自分を否定している。それだから、グゥーッと来た、上から。だから、

「我を見しものは父を見しなり」

と。「何ものでもない人」が「父をみしなり」という、絶対矛盾の世界が本当の世界です。それは、受け身でもって受けとる世界はもの凄いですから。こちらからやるのとは違う。ベートーベンの音楽はどちらかというと、こっちからの響き。バッハのは上からの響き。ベートーベンは上からではない、とは言いませんよ。けれども、彼の性格からいって、そうなんです。

無力なるものが、最大の力を持つんです。

「ゼロ・イコール・無限大」

になる。私は詩の中でそのことを克明に書くから。

●キリスト直結者

18人々これを聞きて黙然たりしが、やがて神を崇めて言う『されば神は異邦人にも生命を得さする悔改を与え給いしなり』

なんて、余計なことを言った。彼らはペテロに参ってしまったんだよ。お前たち、いつまでも旧約の世界にこだわっているなと。

19斯てステパノによりて起こりし迫害のために散らされたる者ども、ピニケ、クプロ、アンテオケまで到り、ただユダヤ人にのみ御言を語りたるに、20その中にクプロ及びクレネの人、数人ありてアンテオケに来たりし時、ギリシヤ人にも語りて主イエスの福音を宣伝う。

語らざるを得ない。

21主の手かれらと偕にありたれば、数多の人、信じて帰依せり。

キリストに南無した。非常にはっきりしてるね。

22この事エルサレムに在る教会に聞こえたれば、バルナバをアンテオケに遣わす。

バルナバはクプロ島の人です。

23かれ来りて、神の恩恵を見てよろこび、彼等に、みな心を堅くして主にお

らんことを勧(すす)む。

「堅くして」とは、ゴタゴタ動かないで、ということ。

「しっかりキリストに居れ」

と。

「主に居る」

という言い方はヨハネ伝15章にたくさん出ている。

「我に居れ、我に居れ」

と。

24彼は聖霊と信仰とに満ちたる善き人なればなり。爰(ここ)に多くの人々、主に加わりたり。25斯てバルナバはサウロを尋ねんとてタルソに往き、26彼に逢いてアンテオケに伴いきたり、二人ともに一年の間かしこの教会の集会(あつまり)に出でて多くの人を教う。弟子たちのキリステアンと称えらるる事はアンテオケより始まれり。

ギリシャ語で、単数で「クリスティアノス」、複数で「クリスティアノイ」となる。クリスチャンのこと、

「キリストに属する者」

です。どこの「国人」というね、日本人、国籍が日本だと。あれと同じ言い方です。キリスト国籍ということ。アンテオケ教会で、パウロはバルナバと伝道した後で、

「これらはキリストのものだ」

と他から言われたわけです。自分たちで言ったんじゃない。みなそうだものな。ルターの「プロテスタント」もそうだ。カトリックの中に彼はいた。彼自身はカトリックから何も出ようとしたんじゃない。だけれども、改革しようと思ったところが、期せずして出ることになってしまった。それだから、カトリックに「プロテスト、反抗」したもの。それが、

「プロテスタント」（反抗者）

というんだね。だけれども、今はあまり「プロテスタント」という言葉を使わない。

「エヴァンゲーリッシュ」（福音的な人たち）

という。みんな、ただ相対的なプロテストじゃないんだから。ルター自身もいつも、

「パウロに帰れ、原始福音に帰れ」

とやったんだから。

「ルター派なんてつくるな」

とルター自身が言っている。ところが、できてしまうんだね。

「党派根性は要らん、全部、キリスト直結だ」

と。我々は、だから、キリスト直結だよ。

「召団」

というのは、キリスト直結の人が集まっている所で、召団が何ものかでも何でもない。そういうのが、この「クリスティアノス」という。我々は「キリスト直結者」である。

●本当のクリスティアノス

我々は、あなた方は、ひとつも恐れることはない。いいかね。本当のことを、パッと言えば、相手は参るんです。私たちは自分の主観で言っているのではないんだから。いいですか、それだけの自信ならざる自信を持って動いてくださいよ。今は、本当はね、本ものを求めることを知らないでいるんですから、本ものを出してやらなければダメなんです、光を。

「汝らは世の光なり」

とキリストが言われた。とにかく、聖書が自然に身についていたら、発するんです。

それで、我々一人一人は、正にこのクリスティアノスです。ところが、本当のクリスティアノスは一体どれだけいるか。キルケゴールが「天才よりも少ない」と言っている。

「天才よりも本当のクリスチャンは少ない」

と。さすがは、キルケゴールだね。彼はそういうことをピシャッと言う。あなた方はウソだ、なんては言ってませんよ、私は。

「あなた方はみな本ものを持っていらっしゃる」

と思うから。どうぞ、本ものらしく、勇ましく、男でも女でも老いたるも若きも、恐れなく動いてください。

著作集第十巻の「7月14日」の「聖言は火の如し」は、藤井先生の好きなエレミヤのところだ。藤井先生は、旧約の預言者でエレミヤが非常に好きだった。非常に人間的な心の深い預言者ですね。涙を持っている。イザヤのことは余り言わなかったな。イザヤが好きだったのは、内村先生だ。内村先生もエレミヤは好きだったけれどもね。とにかく、無教会の、特に内村、藤井、この二人は非常に旧約の預言者を愛した。

「預言者から本当の意味の愛国を私は学んだ」

と内村先生は言っている。これは藤井先生もそうでしょう。

「パウロからは、個人的な福音を受けとった。イザヤからは本当の愛国を受けとった」

と。藤井先生はエレミヤから。

「エホバよ、汝我をたぶらかし給い、げに我はたぶらかされたり。汝は強し、我に勝ち給えり。われは日ねもす人の笑い草となり、人みな我を嘲（あざけ）る。われ口を開く毎に「暴逆」と叫び、「略奪」と呼ばわる。エホバの言はわが身の恥辱（ちじょく）となり、日ねもす嘲弄（ちょうろう）となるなり。我れ「彼のことを口にすまじ、御名に在りて語らじ」と言わば、わが胸の中に燃ゆる火の如きものありてわが骨の中に閉じこもり、忍ぶに疲れて抑（おさ）うるに耐えざるなり。」（エレミヤ20・7～9、私訳）

「汝は強し、我に勝ち給えり」

と。神さまにうち勝たれなければダメなんですよ。分かるの分からないのではない。

「参りました！」

と。

「しょうがないじゃないか、謀略したり、略奪したりしてと。神さまに言われたままに率直に言うものだから、皆に嫌われるんだ。あざけられるから、もう止めた、神さまの言はもう言うのはごめんだと言って止めようとすると、内側から火の如くに燃えるものがあって、これは語らざるを得なくなる。神の言葉がほとばしって来る。だから、私は決して黙さないんだ」

と。これはエレミヤの言葉です。

「神の言に、自分は酒に酔える人の如くに酔っている」

なんていう言葉もあるんだからね。

●本当のクリスティアノス

著作集第九巻の382頁に『恩寵の跡』という文章がある。これは１９３１年12月13日に私が書いた。随分前だね、もう今から60年前だ。やっぱり長生きしたもんだな。

あなた方から私に手紙もくれないし、私も書きもしないから、どうぞ、一方的な手紙だと思って、私の書いたものを読んでくださいよ。［『恩寵の跡』、第八巻150頁『藤井武先生の片影』の朗読省略］。

まだ、いくらでも、詩がありますけれども、よしておきましょう。やはり、自分で読んでみると、昔がまざまざと浮かんできますね。藤井先生は、とにかく、本当に捨て身でやった。先生の亡くなった時には、貯金もなければ借金もない。本当に、その日暮らしをしておられた。これが先生の信頼の実存なんです。先生の著作が――矢内原先生が藤井先生の著作集を出した。私はもちろんお手伝いしたんですが――その印税がお子さんたちの生活の資になった。矢内原先生が多少補ったかも知れませんけれども。そういうわけでね、その生き方は徹底していた。恐れなく自分の信ずるところを言うものだから、内村先生も

「藤井はこわい」

と言った。その藤井先生がまた、私の兄貴を非常に愛して、顧みてくださいまして、

「小池君の兄さんは一万人に一人いるかいないかのような人だ」

と言った。兄貴の仆れた時には、非常に先生は残念がられたです。

いろんなドラマを通して私も鍛えられて来たわけです。皆さんも、どうぞ、人生はいろんなドラマがありますから。それは全部、あなた方のためになる事です。いわゆるプラスもマイナスも全部、この十字架・聖霊の世界では、全部本当のプラスになる。ひとつも悔いる事はないです。それでは、祈りましょう。